

コパーレニアレンス

「自由ドイツ青年運動年代記 (I)」

——創立より第一次世界大戦に至る

渡り鳥同盟——」から (その一)

増 永 良 丸

コパーレリアーレンス

「自由ドイツ青年運動の年代記」(I)

——創立より第一次世界大戦に至る渡り鳥同盟——から…(その一)…

増 永 良 丸

序 言

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのドイツ、後進性を取り戻そうとする急速な資本主義の成長を援護し、さらに連邦性統一ドイツを軍国主義的政策によって実現することを強行したドイツ帝国の時代においてドイツは高度の繁栄を獲得したが、他面そこに分業による人間疎外、知性偏重等々の諸矛盾が漸次表面化してきたことは一つの必然であった。かくてこれらの矛盾を解決しようとする教育運動が起ることとなる。かの「芸術教育」(Kunsterziehung)の運動がそれであり、又「青年運動」(Jugendbewegung)もなかでも「渡り鳥」(Wandervogel) (特に第一次世界大戦以前のもの)の運動はその代表的なものであった。そして、H・ノールの述べるようにこれらのさまざまな教育運動は二〇世紀初頭のドイツ教育史において固有な位置を占めることとなるのである。(Herman Nohl; Die pädagogische Bewegung in Deutschland und ihre Theorie. Vierte Auflage. 1967. S. 12~16.)。

処で前記二運動中、特にドイツ社会教育史乃至民衆教育史という

観点からみて有意味なものは改めて述べる迄もなく渡り鳥運動であるといえよう。何故なら芸術教育運動は優れて学校教育について考えられたものであったのに対し(一九〇一年のドレスデンの芸術教育会議)、渡り鳥運動は学校の教育活動の外部において青年によって自発的に発想され且つ運営された青年の自己教育の運動であり、分業と機械化の資本主義的生産体制と都市文明、それと共にそこに出現した知識と技術の詰込み教育に対決して、青年が自己の主体性と人間性を回復し確保しようとした自己教育の運動であったからである。処でかかる文明批評というべきものを動機としたこの教育運動はどのような処にその方法的原理を見出さんとしたか。「遍歴」(Wandern)がそれである。重ねていえば中世教育の中にその原型が見出されるような遍歴、特にブレットナーの説くように「生命の源泉への還帰」(Fritz Blättner; Geschichte der Pädagogik, Sechste Auflage, 1968, S. 213.)ともいへべき自然の世界の遍歴を通じてのみ感情の解放と人間性の回復が果されると彼等青年は考えたのである。渡り鳥という表現はその点において誠に適切なものがあつたわけである。そしてこの運動(特に第一次大戦前のもの)が、ブレ

ットナーによって「叙情的浪漫主義的であり、個人主義的である」(Fritz Bätner; *ibid.*, S. 214.)と評される所以もこのようにこの運動の本質を把握する時明かとなるのである。

勿論彼等青年はかかる遍歴を経て人間性を回復しつつ再び現実に戻帰することを忘れるものではなかった。凡てを宥和して彼等ばかりで憎んだ大都市の喧騒の中へ戻った。彼等は克服したのである。彼等はそれら凡てを温かい明い光明の下で眺めつつ留まったのである。何故なら彼等は今や理解したから。とはこの運動の指導者の一人ブロイエルが、遍歴者は現実に戻帰すべきであり、又その際遍歴が現実との対決において如何なる効果を挙げうるかを指摘した言葉として意味深いものがある(Engelhardt)。(*Die deutsche Reformpädagogik*, B1, 1961, S. 276.)

要約的にみて以上のような特質をもつ渡り鳥運動はあくまで青年の自主的自発的な自己教育の運動であった。かくてそれは当時の政府や政党や宗派などといった青年の外部に存する組織体からの青年に対する教育活動としての「青年指導」(Jugendpflege)から、例えば「ドイツ新教青年団国民連盟」(一八八三年結成)、「ドイツ青年労働者同盟」(一九〇四年設立)、「自由青年組織同盟」(一九〇六年成立)、さらには「若きドイツ団」(一九一一年結成)などといったさまざまな青年指導活動からは明確に区別されることとなるわけである。特にそれは軍国主義的であったドイツ青年団運動とは対立していたのである。この点は渡り鳥運動の特質をなすものであって、この運動を正しく理解するためには看過してならない点である。但し渡り鳥運動が改革的ではあったが社会主義的なものではなく、又真に近代的民主的な精神に全面的に立脚したものでもなかったことは附記しておかなければならぬ処である。

ではかかる特質をもってドイツ社会教育史上独自の位置を確保するに至った渡り鳥運動は具体的に如何なる過程を辿って展開されたか。この問題の検討は社会教育史研究の一つの課題となりうるものであるが、私がここにコパールとアーレンスの「自由ドイツ青年運動の年代記」(I)―創立より第一次大戦に至る渡り鳥同盟―(*Copalle u. Ahrens, Chronik der freien deutschen Jugendbewegung. I. Die Wandervogelbunde von der Gründung bis zum I. Weltkrieg. 1954.*)の抄訳を試みようとするのも実はこの課題研究の基礎的資料を提供しようとするからである。これらの人々は何れも身を以て渡り鳥の成長期を体験し且つ指導してきた人物であることを勘案する時この文献的資料的価値も認められるのではないだろうか。(尚このコパールとアーレンスの文中に地名等につき理解し難い点が処々あり、今後の研究の一つの課題としてゆき度い。)

I 原始渡り鳥の年代記

序言

ジークフリート・コパール博士

一九一一年一月四日渡り鳥の第五〇回誕生記念日が西ドイツやスイスにおいては新聞や雑誌によってそれ相当に評価されて送られた。諸々の批評は著者に知られた限りでは例外なく好意的であるが、然し殆んど凡ての人々は容易に考えることが出来、又それを宥しうる欠陥、即ち最も古い時代の数、日附、事実の再現が不十分であることを悩みとしている。渡り鳥の発祥史はまさに伝説的になりつつあるのである。

それ故私は一九〇一年の一月四日の「原始渡り鳥」(Ur-Wan-

der Vogel)の最後の生き残っている共同設立者として、ことが余りに遅くなる前に、原始時代の曖昧さをいくらかでも明るくしようとする願ひ、つきに資格のある歴史記述家の領地に下手に手出しをしようなどと願わずに、綿密な配慮を以て集められた一八九六年―一九〇六年に至る年代記を綴ろうと思ふのである。私は決して、歴史を綴ったり、年代記を書いたり、決して通俗講話をものしたりしようとはせず、光明遍照の体験渡り鳥を描こうとはせず、ひたすら秘密に通じた者達のみがそれを追跡しうる内面的なもののみを解明せんとするものである。

私の叙述は一部は文献的典拠に基づいているが、大部分は数や事実や人間についての私個人の記憶と十分な認知に基づいたものである。

厳密に考えれば原、始渡り鳥は、渡り鳥、生徒旅行委員会(Wandervogel, Ausschup für Schutlerfahrten) (A.r.S.)の解散とともに一九〇四年六月二九日幕を閉じたわけである。(下記参照)。それにも拘らず私は私のかつての友であり悲劇的な人物たるカール・フィッシャー(Karl Fischer)に対する敬虔な気持から、年表を一九〇六年秋の彼の支那への旅立ちまで継続すべきであると信じたのである。もし私が一九〇四年から一九〇六年の間について、私が共同設立者であった一九〇四年六月新設立の、渡り鳥、ベルリン・シュテグリッツ登録団体(Wandervogel, Eingetragene Vereinigung zu Steglitz bei Berlin)に「ごつて」私には余りかかわりのない一九〇四年設立の旧渡り鳥(Altwandervogel)についてよりも、より多く報告したとしても、願わくはそれを赦して頂き度い。

最初の、そして私の知る限りでは唯一の学問的な基本的な典拠的な探究に基づく第一次大戦前の渡り鳥の叙述を試みているのはハイ

ンリッヒ・アーレンス博士である。彼の論文「創立より第一次大戦までのドイツの渡り鳥運動」がそれである。この論文は一八九九年ハンブルクで出版され二六九頁のもの。ハンブルク所在のハンザ―組合出版部発行であるが、目下絶版である。

前史

原始渡り鳥(一九〇一年一月四日より一九〇四年六月二九日迄)の二年半の歳月に先行するのが、渡り鳥(Wandervogel)という名称がまだ存在せず、従つて我々がそれを「前渡り鳥」(Vor-Wandervogel)と呼ばなければならぬ(一八九六年初期から一九〇一年一月四日迄)の五年半の年月である。この時代に協同体―青年遍歴の新しい種類のものがつくられる。この時代に協同体―青年遍歴の新しい種類のものがつくられる。この時代に協同体―青年遍歴の新しい種類のものがつくられる。この時代に協同体―青年遍歴の新しい種類のものがつくられる。(もつと詳しくいうとヘルマン・ホフマン―フェルカーザンプ。渡り鳥の初期から、原稿、一九五二年春)。

ヘルマン・ホフマン(Hermann Hoffman)、一九二一年以後ホフマン―フェルカーザンプ(フェルカーザンプはバルチック人のフェルカーザンプの流れをくむ東プロイセン―バルチック人たる母の名による)は一八七五年一月一日シントラスブルク東区に生れ、一八九四年秋マルデブルクのゲエリツケ・ギムナジウムで卒業試験(Abitur)を受け、一八九四年秋ベルリン(ステグリッツに居住)哲学の学生となり、一八九五年復活祭の時に法律の学生となり、一八九九年の始め一月にはナウムブルクで國家試験に合格、一八九九年秋マルデブルクで司法官試験となり、一九〇〇年一月二五日コンスタンチノーブルのドイツ大使館の渉外係に任ぜられる。トルコ(一九〇二年パイルット、一九〇六年コンスタンチノーブル)、チ

エッコスロバキヤ、ポーランドにおいて領事館事務長、領事、総領事。この熱狂的な速記者（シエレイ・ジュステムの傾倒者）は

一八九五年

テルトロー郡のステグリッツのギムナジウムの校長ロバート・ルエック（一八五六—一九三〇年）博士からこの学校の中に速記術コース（無料）を設置する許可を得る。参加者は生徒速記者同盟たる「ステノグラフィア」（Stenographia）をつくって結集する。この同盟から前渡り鳥が誕生する。

一八九六年

春

ホフマン（リヒャルト・ウエバー〔下記参照〕の一九〇六年三月二日のステグリッツ E. V. 第三巻の第二八頁の報告新聞における「孤児レーマン」を参照せよ）の指導の下で—かの時代にとつては異例であるが—校長の認可を得てのグリュンネワルトへ向けての最初の一日遍歴（練習行進）。この校長は当時下級三年の生徒たる息子のロータールをそこに参加せしめている。

夏

凡そ一四人の参加者を得てトイピッツへの二日間の旅行。

一八九七年

凡そ一五人の参加者を得てのハルツへの二週間に亘る旅行。

一八九八年

チューリンゲンからローヌ河、スペスサル河、ライン河を下ってキールンに至る凡そ二四人の参加者を得ての四週間の旅行。

一八九九年

（全渡り鳥文献が示すように一八九七年でなく）二八名の参加者を得てのバイエルンやベーメンの森林通過の四週間の旅行、その中

には上級一年のブルノー・ティード、下級一年のカール・フィッシャー（Karl Eisler）、上級二年のリヒャルト・ウエバー、下級二年のハンス・ブロイエル（Hans Breuer）がいる（凡そこれらの人々は下記参照）。シュバルツエンベルク侯のクバニー原始林における滝のように降る雨の中のテント生活。ウルトミュンヘンとブツトヴァイスにおける確実な、ホフマンによって準備された受容れと市民の宿舎。旅行の頂点—大フランケンシュタインにおける夏祭。

自己のドイツ語の教師シュトレター教授によって刺戟されてホフマンはこの旅行で彼自身によって一八九〇年以來—彼が生徒として果す最後の遍歴はヴェネデツヒに至るものであった—いとなまれた新しい遍歴の方式を確立する。有効な日中行進、最少の費用での最も単純な生活の仕方、自分で組立てたアルコール沸し器による料理—ライプツヒのウアルター・フィッシャーによる一九〇九年の遊牧民の深鍋と木材の火を用いる最初の企図（「渡り鳥」ステグリッツ登録組合北方紙、四巻六号、一九〇九年、六六頁）、村の宿屋、納屋、共同設置可能なテントにおける宿泊、時には市民の住宅での宿泊、歌唱（民謡、遍歴歌、学生歌）の熱心な教育、統領（ホフマン）、二人の頭（その一人がフィッシャー）、遍歴の仲間、新参遍歴からなる組織、ホフマンによって企画され且つ記された諸規定などがそれである。

凡てのより大きい規模の旅行ではホフマンが指導者（ヒュラー）であり、フィッシャーが次席指導者である。

一九〇〇年

一月末ステグリッツのファイヒテベルクでのホフマンとフィッシャー—との間での徹底した討論。ホフマンは全祖国にステグリッツの模

範に従う生徒遍歴の宣伝をすることをフィッシャーに熱心にいいきかせる。

すでに「同盟」の具体的形式が考えられたということはある。そうしないように見える。「生徒共和国」の思想は完全に拒否されるべきである。

(ホフマンの書簡、一九五二年)

二月、ホフマンはコンスタンチノープルへ行く。速記コースを上級二年のウェバーがつづけて指導する。

カール・フィッシャー(Karl Fischer)

(大体一九〇一年迄 Carl、一八八一年ベルリンに生る。一八八八年ステグリッツのギムナジウム予備校入学、一八九一年六年、一八九七年上級二年「一年志願兵」、一八九八年下級一年、一八九九年秋上級一年、一九〇一年卒業試験、法律と支那学の学生、一九〇二年復活祭からは法律のみ。一九〇六年—一四年在支那「青島、上海。叙述の結末を見よ。」、一九一四年—二〇年日本の戦争捕虜(第一次大戦参加を含めて：訳者)一九二〇年—一四年ステグリッツに居住、一九四一年六月—三日ステグリッツで死去)はホフマンの出発後に運動の指導を引き継ぎ、そして理念を彼の考えでさらに発展させる。熱狂的であるが、然し悪しくならざらしている時代がつづく。(一九五二年の三月二日のコパーレ宛のデーネルの書簡、下記参照)。理想は中世的な旅行をする学生、中世の遍歴学生(Vagant)、又は遍歴学生(Bachant)、「(さうだ、Bachus(「酒神」)でなく Bachant なのである)、南部ドイツ語と中部ドイツ語では Bachant)。順位段階は、生徒、若者、遍歴学生(三、四度遍歴をしたもの：訳者、岩波講座、教育科学、第八冊、青年運動、二八頁参照)、上級遍歴学生、(Scholar, Bursche, Bachant, Oberbachant)。

フィッシャーは「上級遍歴学生」であり、そして「遍歴学生仲間」(遍歴学生会議ではない)の中では絶対的君主である。君主的軍隊的な上級遍歴学生の帝国(「渡り鳥」第三巻におけるフィッシャー、一九〇四年の六月の月報、四四—四五頁)。「渡り鳥」が機械文明を批判する点において進歩的であったが、他面猶ドイツ帝国の体制を暗々裡に肯定していることがここに窺える(訳者)。上級遍歴学生は、試験済みの学生を「若者」に、試験済みの若者を「遍歴学生」に任命する。

彼は「若者課業」又は「遍歴学生課業」の提出を求める。これらの人々は彼が十分知っているかつての同年令の同窓生であり又同級生である。「生徒」と「若者」は行商人と見られないため旅行中学生帽を、一九〇二年からはボタン穴を通してひっぱられる緑—赤—金色の紐、並びに渡り鳥帽子(赤と黄の線の入った緑色の布)をかぶり、「遍歴学生」と「上級遍歴学生」も同じような学生帽をかぶる。南ドイツのルエツザックは小背のうと獲物袋を押しつけ、旅行毛布は傘を押しつける。フィッシャーを九〇年台において振いたたせているところのオーストリアのドイツ民族の学生から引き継いだ挨拶、ハイル!。口笛を吹くことがコパーレによってもち込まれる。「南へ今や小鳥はいつも向ってゆく」という言葉も。旅行における最初の楽器はハーモニカと鳩笛(俗称「オリノコ」)。旅行中や居酒屋での最初の歌唱の本は「オランダ芹」(歌の本の名称：訳者)と学生の宴会の歌である(或は類似のもの、新聞紙大、一〇ペニク)。

夏・大旅行。上級一年たるフィッシャーの唯一人の指導の下での最初の旅行であり、エッケビルゲとミレシヤウエルに向ってのものである。下級一年のリヒャルト・シューマン(下記参照)はフィッ

シャーと対立し離れてゆく。彼は一九〇四年六月二十九日共同設立者としてE.V. (後記)の最初の分裂の項参照；訳者)に加入し、幹部に選ばれる。

一九〇一年四月一〇日ツェーレンドルフのムッター・モークフでの家族祭り。

一八九七年—一九〇一年一月四日には一〇回の大旅行が一〇八日の遍歴日数と九五人の参加者を得て試みられるが、それはホフマンとフィッシャーとヨハネス(ハンス)・プロイエルの指導によるものである。(プロイエルは一八八三年四月三〇日ハレのグレーバースに生れ、一九〇三年首席生徒として卒業試験をうけ、マルブルク、チュービゲン、ミュンヘン、ハイデルベルクで医学を学び、グレーフェンローダで医師となり、一九一八年四月一九日軍医となりヴェルダンで埋められ、四月二〇日カルレスで没、マギネスに埋葬さる。)

原始渡り鳥 (Der Urvandervogel)

一九〇一年

一月四日、フィッシャーが卒業試験の後に、原始渡り鳥、生徒旅行委員会 (Ur-Wandervogel, Ausschuss für Schulfahrten, A.f.S.) を設立する。ステグリッツ市役所の第二後部室で行なわれる会議には凡そ一二人が参加したが、それらの人々の中には次のような人がいる。

1 ウオルフガング・キルフパツハ

ステグリッツの文筆家 (一八五七年九月一八日ロンドンで生れ、一九〇六年バッド・ナウハイムで死去)

2 ハインリッヒ・ゾーンレイ

ステグリッツの文筆家、後に教授と名誉博士 (一八五九年ゲ

ツチンゲンのユンデに生れ、一九四八年ホルツミンデンのノイハウスで死去)、すでにその息子達を運動の中に加わらせている。

3 ヘルマン・ミュラー・ポーン

ステグリッツの文筆家 (一八五五年ベルリンに生る。)

4 アウグスト・ハーゲドルン

ステグリッツの文筆家 (一八五六年西部ドイツのホックホルストに生る。)

5 医学博士ヘンツェルト、(ツェーレンドルフの医者、常に一人息子を会議の際伴う。)

6 カール・フィッシャー (上記参照)

7 ブルノー・ティード、工科関係学生、後に工学士、ベルリンの鉄道管理局の橋梁建築者 (一八八一年一月三日ユッカーミュンデに生れ、一九〇〇年復活祭の時卒業試験、一九二二年五月一日フリーデナウで死去。)

8 エルンスト・キルフパツハ、ウオルフガング・キルフパツハの息子、哲学の学生 (一八八一年三月八日ミュンヘンに生る。一九〇〇年復活祭の時卒業試験、狂人になり一九〇六年六月二八日死去。)

9 ジークフリート・コパーレ、哲学の学生 (一八八二年四月二日エルバーフェルトに生れ、一九〇一年二月二八日卒業試験。)

10 ウオルフガング・マイエン、機械徒弟、(一八八四年生れ、一九四〇年死去。)(上級一年のウエバーと下級一年のプロイエルは生徒として会議には参加できない。又グリットとブリ

ンクマンが始めて後ればせながら出席する。)

キルフパツハが議長となり、ゾーンレイが議長代理となる。

最年少のマイエンが、渡り鳥の名称の発見 (Erfindung) (発見 Erfindung でない) に成功する。(この転用された意味においては、すでに一八五一年のオットー・ロケッテの、山番の花嫁探しの旅の中に、空飛ぶ彼女の渡り鳥、…私も一羽の渡り鳥とある。) この名称は旅行ずき (Wanderlust) などといった全く詩的な名称が斥けられあとにびつたりくるものとなる。そして爾後数百万人のドイツ人に一つの概念となる。(この点はかつて岩波講座、教育科学、第八冊、青年運動四七頁で説かれたことと異なるものがある。…訳者)

設立後二日たって両親と生徒とに対する運動が始まる。一月六日の最初の印刷されたビラ (一月九日の交際上の集りへの招待)。

一九〇二年

一月一日

フィッシャーは、生徒名簿を整備する。登録されるものは、上級遍歴学生への身分に在る者に向つて次のような成句で宣誓する義務をもつ。

私は尊敬と忠実と服従を約束する。

遍歴学生への呼称は "Her" と "Sie"、ただ可なり熟知の者にはたまには "Du" もよい。

ステグリッツ・ギムナジウムの校長ロバート・リュック博士は最初の学校長として渡り鳥を公式に認める。フィッシャーが大講堂で生徒達に講演する。

復活祭、ツューレンドルフの、ムッター・モーコーフ、における最初の渡り鳥の閲兵。写真はフィッシャーが中央に立ち、彼の右と左に幼い渡り鳥のキルバッハとゾーンレイが膝をついて腕をくみ、一方の脇にコパーレが、他の脇にプロイエルが立っているのを示

す。

復活祭、ホーヘン・ゴルムへのフィッシャーの指導の下における二五人の二日半の旅行。コパーレは山小屋の屋根の上に立って次のような音頭をとる。

お祖国、如何に汝は美しいことか！ フィッシャーは立ち上り、そして帽子を脱ぐ。

復活祭、指導者として次の人々が A.L.S. に入ってくる。

リヒヤルト・ウエバー、哲学の学生 (一八八四年一〇月一九日ベルリンに生る。一九〇二年一七才で卒業試験「首席」、一九一一年三月二日高等学校教員の候補者として死去、植物学者にして第一次大戦で戦死したエルンスト・ショットキー博士による同様の北方版の一九一一年五月号紙における美しき名声)。ルドルフ・ハルトマン、哲学の学生、一九〇四年から神学の学生 (一八八二年一〇月一九日ベルリンに生る。一九〇二年復活祭の時卒業試験、退職牧師。)

聖霊降誕祭、祭礼の前十日間で A.L.S. に入ったもの。ルドヴツヒ・グルリット教授 (ステグリッツ・ギムナジウムの上級教師) (一八五五年五月ウイーンに生る。一九三二年七月二日フロイデンシュタットで死去)、コンラアディン・プリנקマン、上級教師、その後ツエーレンドルフ・ギムナジウムの教授 (一八七三年一月四日ベルリンに生る、一八七五年以降ステグリッツ在住)。
聖霊降誕祭、約四〇人でのフィッシャー指導の下におけるヴェンデルへの雨に台なした旅行。

六月、ミューゲルベルゲンにおける全ドイツ同盟の客員としての A.L.S. の最初の夏至祭。一人の息子を渡り鳥の中にもつギムナジウムの教授、パウル・フェスターフリーデナウ博士のユダヤ人に対決

する熱弁。

クルト・デーネル（一八八四年六月一日生）、一八九八年以來旅行学生であつたが、今や脱退する。彼は一九〇四年六月二十九日以降、四ヶに与し、牧師として渡り鳥組合チリア（一九〇九年—一九二二年のベルリンの修道院教会）を設立し且つ指導する。

夏、ラングヴァイツにあるピツヘラーの勝利の國々における最初の夏祭り。渡り鳥の最初の催し、その催しへ一人の教師（プリンクマン）が参加を敢てする。

夏、指導者としてのプロイエルとティーデの下におけるレーン、スペザルト、オーデンヴルトを經由しハイデルベルクに至る四週間の大旅行。ロールとアシャフェンブルク間の距離（三八キロ）が一晩で踏破される。

晩夏、メーエンが地方集団、グロスリーヒターフェルデを設立したが、それは急速に成長し、一時はステグリッツの地方集団を数において凌駕する。新しいリヒターフェルデの下においては特に渡り鳥の父といふべき人々がいる。教授ハインリッヒ・アルブレヒト博士（国民経済学者、厚生中央官庁指導者、一八五六年三月一六日ラツテデー「ホルデンブルク」に生れ、一九三一年ベルリン・リヒターフェルデで死去）。教授メナデル博士（古代博物館の貨幣陳列室主任）、王室枢密顧問官フェスパー（一八五五年リュウデンシエルトに生れ、フランスで一九一四年一月一四日戦死）。王室顧問官ヘルムゼン、それからブランド博士（シャロットテンブルク工業大学冶金学教授、一八五〇年西部ヴァイツェンに生れ、一九〇七年死去）。

九月—十月

きびしい寒さの下でのリュウネブルガーの荒野經由の三〇名での

フィツシャー指導による七日間の旅行。一日当りの費用は平均して六三ペニー。終了宴はルューネのクロスタークルックで行なわれたが、その際フィツシャーは遍歴棒をもって上席者となる。最初の外部集団としてのリュネブルク地方集団の設立（議長、新教地方監督のメーエル）。この努力を要する旅行には渡り鳥を自分の哲学によつて理解せんがためにグルリットが参加する（四七才）。

秋、コパーレが始めてパリ流の配置で最初の渡り鳥交響楽団を設立するが、それはヘルマン・ホフマンが臨席したクリスマス祭りで始めて姿を現わす。フィツシャーとコパーレは仮装して二部合唱をする。ああ如何に旅は貴重なものか（神話、水の精、II・I）精神的深化についての最初の努力。一月の通知は次の講演と音楽演奏を報道する。一月二〇日フィツシャーの旅行する生徒、一月二六日コパーレのウエストファーレンの風景、一月一六日ウエバーのオランダ人、一月三〇日コパーレのギリシャ芸術の発端（ギムナジウムの上級一年と下級一年と上級二年のために）。

復活祭、ブランドンブルクレーニンナーファーフポッダムへのフィツシャーと凡ての遍歴学生の指導による八〇名の集団旅行。新参者として卒業試験合格後哲学の学生エルンスト・アングラムがベルリンから参加する。

爾後における集団作業や、不正遍歴学生及びそこには決定的なものの即ち生の必要が欠けている放浪者や、もはや彼を明らかに見さしめない（プロイエル、カール・フィツシャーへの呼びかけ、遍歴者、第二巻、一九一〇、五月、三〇—三八頁）フィツシャーの専制主義に対する個々の遍歴学生（特にテーデ、コパー、ウエバー）や登録者の一部のもの増大する抵抗。

七月四日、再び全ドイツ連盟の客員としてペイヘルスウェルダールにおける渡り鳥の第二夏至祭。

夏、二つの大規模な旅行。一つの旅行は第二回目だが、ベームルワルトに至るもの、他の旅行はコパーレの指導で二人を以てウエストファーレン、ライン、ラインの方に至るものである。この旅行で内部的諸緊張が破局に至る。遍歴学生¹に対して渡り鳥の憲法によれば最高の法廷であるフィッシャーはコパーレの規準も、誠に正しいが資格がない、と判定する。テーデやウエバーに与しているコパーレは A.t.s. に訴える。A.t.s. は三人の關係ある年長の人々（キルバツハ、グルリット、ヴェスパー）から成る名誉顧問を任命する。この名誉顧問は二回の会合で調停を試みたが空しかった。何故なら特有な諸原因が言説によって除去されるよりもずっと深い処に存するから。テーデ、コパーレとウエバーは旅行活動から退くが、その職務は保持する。

夏、教育相はグルリットの報告によって渡り鳥を公式に認める。

（高等学校月報、第二卷九、一〇、九月一〇月号、五四五頁）。

秋、ポーゼンと、半分はドイツ半分はロシアのゴプローゼーへのフィッシャーの指揮によるオーストリア旅行。ロシア国境が半日越えられる。一三日の旅行と一〇三日の遍歴日数と二五〇人の参加者を以て完結するこの年の頂点。

一九〇四年

三月、A.t.s. は最初の渡り鳥新聞を發刊する。渡り鳥、挿絵入り月報。出版者としてウォルフガング・メーエンの兄であるフリッツ・メーエンが八月（第六冊）からフィッシャーと一緒に署名する。

三月中旬、ティーデとコパーレとウエバーはその冬季中実現され

た遠慮をすてて幹部の承認の下に、然し、上級遍歴学生²の承認をうることなくして復活祭旅行を企てる。

新しい討議が A.t.s. で行なわれるが、それはフィッシャーの強情さと衝突して坐折する。とび上らなばかりのブランド教授の絶望した宣言、どうかフィッシャーより署名の上は認められ度し³。フィッシャーは A.t.s. の会合において三月二日から、指導的上級遍歴学生⁴としての彼の職務を辞退する（渡り鳥第一卷第二号、一六一―七頁）。然しそれにも拘らず三月二五日には、その中で彼が完全なる明確さにおいて彼の身分と渡り鳥を同一視している処の赤紙で印刷された、非常通知⁵の中で、ティーデ、コパーレ、ウエバーの各氏から、下品な陰謀と謀反⁶、という非難の下に、遍歴学生の位⁷を取り上げる。このようなことがあったが復活祭旅行は十分な参加の下に実施される。A.t.s. は暫定的な、上級遍歴学生⁸（高等学校教諭ジーベルト博士、一九一六年戦死）を任命する。彼はウツカーマルクへのティーデ、コパーレ、ウエバーの聖霊降誕祭の旅行を承認する。新しい際限のない討議。遍歴学生⁹の争いは学校の構内にまで入り込み全校生徒を煽動する。校長らや教師らは考えこみ、そして邪推するようになる。A.t.s. の諸規定は、今や人がそれを適用しようとする処では適用不可能であることが証明される。アルブレヒト教授が、上級遍歴学生¹⁰の唯一一人の人に合うようにつくられたものでない新しい規定を完成する。フィッシャーはこれらの規定を断乎として拒否する。これまでの規定の文面によれば制度の変更には全員集合の A.t.s. の決議が求められている。然しかかる決議は不可能である。何故ならフィッシャー自身が常に国外の委員と特に在外ドイツ人を獲得しようと努力していたから。（一九〇四年一月一日のキルフバツハ宛のフィッシャーの書簡）。

完全に正しく処理するためには A. I. S. は他の解散に関する規定の簡条に立返らざるをえないことがわかるが、その簡条はこの解散には全委員及び国外委員の四分の三以上の賛成を求める。この目的のために召集された会議が再びステグリのラッツケエラーで、一九〇一年一月四日その設立を見た同じ場所で開催される。

六月二十九日、渡り鳥、生徒旅行委員会 (A. I. S.) は解散する。委員名簿が示す四九名の内一部は文書であるが、とにかく三九名 (三八名の誤植と考えられる：筆者) (その中でアメリカ合衆國に住む一名は追加で) が解散賛成の投票をするが一名は反対の投票をする。一〇名 (大體国外のもの) は投票しない。フィッシャーと会議に出席している彼の信奉者の一群は解散賛成の投票をする。フィッシャーは彼が直ちに彼の研究に身を捧げ、且つ新しく設立されるべき同盟には途中で如何なる妨害をも与えないと明言する。彼は彼の信奉者達と共に会議の部屋を去る。

この日を以て原始渡り鳥の歴史は閉ぢられることとなる。

最初の分裂

渡り鳥、ベルリン・ステグリッツの登録団体

短い休止の後に以前の A. I. S. の出席委員の一六名は、自由になつた名称、渡り鳥、の下に登録簿の中への登録が提議されるべき新しい組合を設立する。この登録は一九〇四年一月二日に行われる。公称は爾後次のようになる。渡り鳥、ベルリン・シュテグリッツの登録団体 (Wandervogel, Eingetragener Verein zu Steglitz bei Berlin.)、略称は "WV Steglitz E. V."、或は "Steglizzer Wandervogel"、或は単に "E. V." とすることになる。幹部は次のように選挙される。第一議長としてグルリット、第二議長としてゾーンレイ、出納係としてアルブレヒト、陪席員としてヘルムゼンと

シューマン (哲学の学生、一八八三年ベルリンで生る、一九〇二年復活祭の時卒業試験、退職高等専門学校正員教授) とシーベルとフェスパール。委員として即時そこに特に次のような人々が就任することとなる。エチブリンクマン、ヘルマン・ホフマン、フリードリッヒ・パウルゼン教授、コルネリウス・グルリット教授、シュタイン (ブラジル探險家、民族博物館々長) がそれである。上級遍歴學生の地位にはコパールの計画に従ひ指導者団が入る。幹部と指導者団との間の結合を、指導者団長が調整する。この重要にして且つ多くの勤を必要とする職務を多年に亘り両者からの完全な信頼の下にアルブレヒト教授がブリンクマンによつて一九一一年解任されるまで引受け且つ指導する。大部分は尚設立会議においてであるが、幹部は最初の七名の、指導者団の委員、を任命する、その七名はテイーデ、コパール、ウエバー、シューマン、ハルトマン、哲学専攻學生ロータル・リュック (一八八三年生、スケートでヴァンジで溺死)、哲学専攻學生ギンター・ヴェントラント (政治學博士、一八八三年八月二十九日生、一九一四年戦死) である。指導者団は自分達の手で適当な上級一年と下級一年と上級二年のものを学校卒業後指導者団の委員に任命される補助指導者 (生徒指導者) として選ぶ。指導者団はその中から書記長、生徒簿の管理者 (生徒簿氏)、圖書と地図蒐集の管理者と常任委員を選ぶ。指導者會議にコパールは評議會の名称を与える (一九一二年の評議會数は一〇〇)。指導者団の委員らが最大限且つ等分に組合の仕事に関与し、又共同責任を自覚するようにするため管理者は普通三ヶ月で交替することとなる。華々しくその実を示し、且つその全力を渡り鳥の内面的生活に捧げることを指導者連に許すこの規約の下において E. V. はどんな危機に出会つても動搖させられることなく、一九一二年一

二月二十九日の自己解消と大きな統一同盟即ち新しき E.V. 渡り鳥、ドイツ青年遍歴者同盟 (Wandervogel, Bund für deutsches Jugendwandern, E.V.) への一九一三年一月五日におけるその委員、その登録者及びその財産の完全な移譲に至るまで存続をつづける。尚この同盟には同じ頃また全渡り鳥、ドイツ団 (略称 "D.B.") が旧渡り鳥 (Altwandervogel) (三、五〇〇一五、〇〇〇) の大部分と同じく賛成加入する。

ステグリッツの E.V. の理想は、意味充実した遍歴 (一九〇五年の歌の本の序言においてコパーレが述べた言葉、下記参照) である。全運動の精神的指導が爾後の歳月の間に E.V. に伝わり、ついに一九〇七年一月二〇日イエナで設立された D.B. (第二回の分裂!) は徐々にこの役割を上級教師であり大学出身の技師たるフェルデナント・フェター博士 (イエナ)、旅行鑑 (一九一〇年) の著者ハンス・ルスナー (ライプツヒ)、ギターのハンゼル、の異名をもつヘルマン・プファイファー (ダムルシュタット)、特に一九〇八年からはハンス・プロイエルというような画家や挿絵画家の指導の下に引受けるようになるが、このような D.B. は遍歴性と放浪性の内的克服に従い、又旧渡り鳥の渡り鳥において最も重要な指導者の人格への分離に従って一般に展開されることとなる。

七月、E.V. は最初のコパーレによって著わされた旅行装備指令^レを出版する。

七月、E.V. にフランク・フィッシャー (カール・フィッシャーと親類でない) が加入するが、彼は哲学専攻学生でありドイツ語学者である (クールラントのメタウに一八八四年三月二四日生。シヤロッテンブルクのカイザリーナーマウグスター・ギムナジウムで一九〇二年卒業試験、一九〇八年六月二〇日博士試験、論文「古

代西北の借用語」、一九〇八年以来ゲッチンゲンのグリム辞書の助手、ランゲンマルクから程速かぬワールンモーレンで一九一四年一月一〇日戦死)。彼の一九一九年に集成され且つ遍歴と観照^レの題の下に出版 (一九二二年八月ルテンシュタインのグライフェン書肆、第二版) された諸論文は真に極度に野生的なもの (プロイエルがそれである) ではないが、完全に渡り鳥文献がもたらした最も美しいものである。

八月、コパーレは二年前彼によって設立され、後に彼によって、でなく、彼に倣ってこのように名附けられた勝利の交響楽団^レを拡張する。この交響楽団の中にはクラリネットによってとりかえらるホーベエの外に全楽器が代替される。(就中ヴィラはプリンクマン、笛はティエデ、クラリネットはシューマン、号角はエンゲル「下記参照」、大ラッパはコパーレ、場合によってはスタイガー)。それは直ちに二五人から三〇人の交響楽団に発展し、一九〇四年の^四のクリスマス祭ではすでになかでもハイドンのシンフォニー六 (鐘鼓を伴う) の第一楽章と第二楽章を演奏し、そして E.V. が一般に存立している限り存続をつづけることとなる。最初の指揮者コパーレ、工業関係専攻学生ワルター・エンゲル (工学士、政府関係土木監督、建設省建築掛、その後の音楽教師、一八七八年一月七日トロン・ロツツエネークに生れ一九〇一年二月卒業試験)、哲学専攻学生ロバート・スタイゲル (哲学博士、ゲッチンゲンで音楽史の大学私講師、一八八二年八月二日ライプツヒに生る、一九〇一年二月二八日卒業試験、一九一四年八月戦死)。旅行中の楽器、ラッパ (一九〇四年以来) と他の角笛 (吹奏四重奏者)。一九〇五年と六年南ドイツからギターが姿を現わす、その後またナックケン^レのヴァイオリン^レが姿を現わす。さえずるようなマンドリンやがあ

があと鳴くアコデオンのような騒音を出す楽器は厳禁される。ステグリッツ市役所の整然たる傑出した人々の吹奏。F.V.の最初にして且つ最高のラウテ歌手は医科学生ワルター・クルトイイスと工学関係専攻学生ワルター・ケーラー（この人も一九一〇年以來仲裁政治家、兩者共第一次大戦で戦死）。

九月、F.V.は広告面のない自己の定期刊行物を発行するが、それに対し一九〇八年度の巻の第五号まではアルプレヒト教授が責任を以て署名し、同巻の第六巻からはフランク・フィッシャー博士が署名する。その定期刊行物には、渡り鳥、報知新聞、ベルリン・シユテグリッツの登録組合」という名称が附せられるが、一年に六冊で、その水準はそのさまさまな攻撃が無視される、絵入り月刊雑誌の水準をはるかに越える。

秋、コパーレは最初の渡り鳥歌の本の出版を勧める。指導者団によつて選択された歌の本委員会（コパーレ、ティーデ、フランク・フィッシャー）は、一九〇五年の復活祭からマックス・ポール（下記参照）と上級生徒クルト・デーネル（上記参照）によつて助けられて一九〇四年の冬から一九〇五年にかけてこの本を完成する。それは主に一八世紀—一九世紀の民族的及び民衆的歌曲たる一二の歌とコパーレ（記名なし）の詳細な序言をもち込み、ベルリン、ステグリッツ登録団体渡り鳥によつて出版された渡り鳥歌の本」という題名の下に一九〇五年六月ハルスのオスタヴウイックにあるチツクフェルト書肆の手で世に出る。（第二版は一九一〇年フランク・フィッシャー一人で世話されたが、尚F.V.の注文で出版され、三稿は、渡り鳥歌の本としてであるが、フランク・フィッシャーの弟であり美術画家であり退職の大学図画教師及び講師たるオットー・フィッシャーラムベルクの書籍装訂で、ドイツ渡り鳥同

盟のためにフランク・フィッシャーによつて一九一二年ライプツヒのホフマイスターで一千部—一万部（新しい計算で）出版される。一九一四年には五万四千部、一九二九年には一三万部出版される。フランク・フィッシャー歌の本は行進歌と合唱歌のための渡り鳥のきまつた歌の本となる。—他のものはハンス・ブロイエルのギターのハンゼルであるが、それはむしろ個人的歌唱のものと考えられ、又特に一五—一八世紀の民謡を含むものである。第一版は一九〇九年の始め「序言は一九〇八年のクリスマス」に出版され、一九一五年には一九万二千部を、一九二九年には百万を越し、一九三三年は一五九版となり、一九五一年には軍歌なしでショット—マインツのリーツェンツ版として一六〇版が世に出るのである。

(つづく)